

楽曲解説

12/5 (火) 第899回 サントリー定期シリーズ

12/7 (木) 第7回 平日の午後のコンサート (*公演詳細は23ページを参照ください)

解説=宮澤淳一

カバレフスキー(1904-1987)

歌劇『コラ・ブルニョン』序曲 op.24

シンフォニー・コンサートの始まりにふさわしい元気で輝かしい音楽とは何か？ モーツァルトの歌劇『フィガロの結婚』序曲、ゲリンカの歌劇『ルスランとリユドミーラ』序曲、シヨスタコーヴィチの祝典序曲などが思い浮かぶが、それらに劣らぬ作品がこの歌劇『コラ・ブルニョン』序曲である。

これを書いたドミトリー・ボリーソヴィチ・カバレフスキー(1904-1987)は、20世紀ロシア(ソ連時代)の代表的な作曲家に数えられる。モスクワ音楽院に学び、同院の教授を務めた。音楽・芸術行政を担った「体制側」だが、実力派であったため、ソ連崩壊後も評価は落ちない。5つのオペラや4つの交響曲など多作で、音楽教育にも尽力した。

スターリン政権下の1936年から翌年にかけてカバレフスキーが作った初めてのオペラが『クラムシーの親方』作品24(全3幕)である。フランスの文豪ロマン・ロランの同名の小説(1919年)に基づく。16世紀フランスのブルゴーニュ地方の町クラムシーに暮らした楽天的な木彫り職人コラ・ブルニョンの波乱の物語である(恋も描かれ、ユーモラスで明快な作品だが、着手した1936年はシヨスタコーヴィチの『ムツェンスク郡のマクベス夫人』が当局に批判された年であり、粛清の時代だった。領主との対決も含む作品だけに、カバレフスキーも慎重になったはずだ)。作品は1938年2月22日にレニングラード(現サンクトペテルブルク)のマールイ劇場で初演され、好評を博し、公演は48回続いた。のちの1968年に改訂、『コラ・ブルニョン』の名で1970年に上演され、1972年にレーニン賞を獲得している。カバレフスキーの代表作であり、序曲のみや、組曲(全4曲)としても演奏される。

序曲(アレグロ〜プレスト、ヘ長調、2/4拍子)は、軽妙で快活な主人公コラを象徴するにぎやかな音楽である。ファンファーレ風に始まり、木管楽器が躍動的な主旋律を提示する。楽想にはシンコペーション(拍節の移動)も効果的に用いられ、打楽器や金管楽器が華やかさをいっそう高めていく。途中には苦難を暗示する場面なども描かれるが、最終的には圧倒的な迫力で音楽は締めくくられる。

【作曲年代】1936-1937 【初演】1938年2月22日サンクトペテルブルク(歌劇全曲)

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット3、ファゴット3(3番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、シロフォン)、ハーブ、弦楽5部

12/5

12/7

チャイコフスキー (1840-1893)

ピアノ協奏曲第1番 変口短調 op.23

※12月5日公演のみ演奏

ロシアの作曲家の中で、欧米に初めて本格的に認められたのはピョートル・イリイチ・チャイコフスキーである。今日傑作とされるそのピアノ協奏曲第1番は、誕生当時は問題作だった。完成は彼がモスクワ音楽院に奉職して10年目の1875年だが、院長でピアニストのニコライ・ビンシテインへの献呈を考えて事前に助言を請うたところ、演奏不能、借用が多いなどと批判され、書き直しを求められた。チャイコフスキーは「一音も変えない」と反発し、最終的にドイツのピアニストで指揮者のハンス・フォン・ビューローに献呈。ビューローは作品を高く評価し、1875年10月13日に客演先の米国のボストンで世界初演をして成功する。翌月にはロシアでも演奏されたが、11月26日のモスクワ初演(チャイコフスキーの弟子のタネーエフ独奏)では意外にもルビンシテインが指揮者を務めた(その3年後にはルビンシテイン自身も独奏を担うようになる)。

第1楽章(アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストロソ～アレグロ・コン・スピーリト、3/4拍子)は、勇壮な導入部の主題(変ニ長調)で知られるが、ソナタ形式を構成するのはそのあとに現われる軽快な第1主題(変口短調、ウクライナ民謡に由来)と憂愁あふれるゆったりとした第2主題(変イ長調)である。各所でピアノ独奏が超絶技巧を披露していく。

第2楽章(アンダンティーノ・シンプリチェ、変ニ長調、6/8拍子)は、三部形式(A→B→A)による緩徐楽章で、夢見心地の雰囲気包まれる。ただし中間部の軽快な主題は当時流行していたシャンソン(楽しく踊りましょう)である。これは結婚寸前でチャイコフスキーのもとを去ったベルギー人の歌姫デジレ・アルトの持ち歌だったらしい(興味深いのは、この旋律はオーケストラのみが奏で、ピアノはそれを弾かない。しかも旋律は軽快で、東の間の夢のように消え去る。ピアノをチャイコフスキーに見立てれば、含みのある解釈ができる)。

第3楽章(アンダンテ・コン・フォーコ、変口短調、3/4拍子)は、リズムカルなウクライナ民謡(さあイワンカ)を第1主題に、雄大な変ニ長調の旋律を第2主題にしてロンド形式が成立する。独奏者が超絶技巧を発揮する華やかで情熱的な音楽である。

[作曲年代] 1875年 [初演] 1875年10月13日ボストンにて

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

チャイコフスキー (1840-1893)

交響曲第4番 ヘ短調 op.36

チャイコフスキーは番号の付された交響曲を6曲残したが、第4・5・6番は、どれも「宿命」を扱った音楽だとする解釈がある。

交響曲第4番は、面識のない9歳年下の女性アントニーナ・ミリューコワとの結婚騒動を起こした1877年(37歳)に書かれた。その出会いに宿命を確信して踏み切った結婚は失敗で、彼は7月の挙式後じきに新婦と別居した。音楽の内容と重なりそうなエピソードだが、今ではアントニーナと知り合う以前に着手した作品だと判明している(別居後の彼はロシアを離れて各地で創作を続け、12月26日、イタリアのサンレーモでこれを完成した)。

初演は翌1878年2月10日にモスクワで行なわれ、支援者となって間もないフォン・メック夫人に献呈された。夫人に宛てた手紙で、チャイコフスキーはこの作品を「私たちの交響曲」と呼び、「宿命」という標題があることを認めて丁寧に説明を書き残した。以下それを含めつつ、各楽章を総覧しよう。

第1楽章(アンダンテ・ソステヌート、ヘ短調、3/4拍子)は、ファンファーレによる「宿命」の動機で全曲は始まる。ソナタ形式で、弦楽器による切迫感のある下降旋律を第1主題、クラリネット独奏によるおどけた旋律を第2主題とする。チャイコフスキーによれば、「宿命」とは「幸福追求の情熱を妨げる、あの運命の力」であり、私たちは従順にして嘆くばかりだ。甘美な夢を見ても「所詮は夢」であって、「人生とは、つらい現実と、幸福をめぐる東の間の夢とが絶えず交替しているにすぎない」し、安らぎなどない。

第2楽章(アンダンティーノ・イン・モード・デイ・カンツォーナ、変口短調、2/4拍子)は複合三部形式で、オーボエ独奏による憂愁あふれる主旋律と、弦楽器による副旋律が構成する。中間部(ピウ・モツ)では、クラリネットとファゴットがヘ長調で活発な動きを示し、ほどなく主部に戻り、楽器間で主題が受け渡されていく——。これは「憂愁」(ロシア語で「トスカ」)の表現だとチャイコフスキーは述べる。つらい思い出、喜ばしい思い出と、遠い昔の記憶が次々に甦り、悲しみつつも甘美な気持ちに浸る様子だという。

第3楽章(スケルツォ、ピチカート・オスティナート、アレグロ、ヘ長調、2/4拍子)は、弦楽器群によるピチカートで始まるユーモラスな音楽である(ロシアの民俗楽器バラライカの合奏の模倣とする説もある)。そこに木管楽器による舞曲(イ長調)、そして金管楽器による行進曲(変ニ長調)が続く。やがて弦楽器に戻り、最後はすべての動機が再現して終わる。これは

「寝入りばなの脳裡に浮かぶ脈絡のないイメージ」で、「いきなりほろ酔い気分の農民たちの絵が思い出され、町の歌が聞こえてくる」のだ。

第4楽章(フィナーレ、アレグロ・コン・フォーコ、ヘ長調、4/4拍子)は、3つの主題による迫力あるロンド形式である。冒頭のにぎやかな第1主題、ロシア民謡の第2主題(「野に立つ白樺の木」)、浮き立つような第3主題。そして第1楽章の「宿命」の動機が再帰するが、第2主題との類似に着目したい。チャイコフスキーは説明する——自分に喜びがないのなら、お祭り騒ぎで喜びに浸る民衆に加わるがよい。すると「宿命」がまた現われるが、人々は気にもとめない。人々は「こちらが孤独で悲しんでいるのを知らない」のだ。「悪いのは自分なのだから、この世は悲しみだらけだなどと言うべきでない。素朴で力強い喜びはある。他人の喜びを喜ぶがいい。とにかく生きていけるのだから」と。音楽は圧倒的な克服感をもって終わる。

こうしてみると、まさにこの交響曲は「宿命」と対峙し、それを克服するプロセスを描いた標題音楽だと解釈できるかもしれないし、結婚騒動を含めた彼の人生と関連づけることも可能だ。また、音楽史的にみれば、これは、ベートーヴェンやショスタコヴィチの第5交響曲とも通じるような、葛藤の要素を操作する西洋的な劇的展開の一例として位置づけられる。

いずれにせよ、私たちは、意味づけにはとらわれなくてよい。純粋に音楽を聴き、音楽自体から伝わってくる情動を体験することも大切であろう。ちなみにチャイコフスキーはこの交響曲について、弟子のタネーエフ(前出)にこう述べた——「あらゆる音楽形式の中で最も抒情的な形式である交響曲とは、こういうものあってはいけないうのだろうか」と。

[作曲年代] 1877年 [初演] 1878年2月10日モスクワ

[楽器編成] フルート 2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。著書に『グレン・ゲルト論』(春秋社・吉田秀和賞)、共著に白石美雪編『音楽論』(武蔵野美術大学出版局)など。訳書に『リヒテルは語る』(ちくま学芸文庫)、『改訂新版 音楽の文章術』(共訳、春秋社)など。